

〈研究ノート〉

「働く」を考える (1)

山 田 修 平

Shuhei YAMADA : A Study on "Work" (1)

鳥取短期大学研究紀要 第68号 抜刷

2013年12月

〈研究ノート〉

「働く」を考える (1)

山 田 修 平

Shuhei YAMADA : A Study on "Work" (1)

「人はなぜ働くのか」、古くて新しい問いである。「食べるため」、「生活のため」と多くの人が応えるであろう。では「仮に十分な金銭、生活の糧があったら、働かないのか」の問いには回答は分れよう。「なぜ働くか」、いわば労働観は時代の変化、社会の状況によって異なる。本稿では、古今東西の労働に対する考え方、日本の神道、宗教における労働のとらえ方、またその後の日本の近代化に大きな影響を与えた徳川時代の思想家・実践家、鈴木正三、石田梅岩、二宮尊徳の生き方、労働観を紹介する。

キーワード：奴隷労働 プロテスタントイズム カースト 科挙制度 神・仏・儒の一体化

はじめに

英語には「働く」に相当する言葉が、work, labor, employ, serve, また「仕事」、「職業」に、work, job, task, business, occupation, calling 等多数ある。

同じ「働く」でも用途や意味は異なる。例えば work は比較一般的な意味で広く「働く」に使われ、labor「肉体的労働・骨折り」、employ は、「雇用される」、serve は「サービスを提供する」、「従事する」の意味合いが強い。また work は名詞でも「一般的な仕事」、job はこれに近いが、「骨おりの作業」という意味もある。さらに「骨折り」が強調されるのが task である。business は「実務的な仕事」を指し、occupation は「天職」的な色彩を帯び、calling となると「聖職」としての職業という意味が強くなる。「働く」、また「職業」をどうとらえるかの相違から派生した用語の違いであろう。

「働く」こと、また「仕事」に対する考え方は、人それぞれとはいえ、社会の状況、時代に制約を受けつつ変化してきた。

本稿では、働くことをどうとらえるか、いわば労働観を考える。歴史を遡り、先ず古代ギリシャ、ローマ時代の労働観、またキリスト教における労働観の変化、インド、中国や韓国の労働観を概観する。その上で日本の神道、宗教の労働観、さらには徳川時代の思想家・実践家の労働観を紹介する。

1. 古代ギリシャ、ローマ時代の労働の とらえ方

西洋文明の淵源を辿ればギリシャ・ローマ文明とキリスト教になろう。

周知のように古代ギリシャは紀元前 8 世紀から紀元前 6 世紀までバルカン半島南東部に栄えた都市国家である。小規模であるが、ソクラテス、プラトン、アリストテレス等を輩出し、哲学、医学、美術等絢爛たる文化の華を咲かせた。この文化繁栄の礎にあったのが奴隷の存在である。農業、手工業、いわば生活を営む上で基本となる衣・食・住の維持のために働く者＝奴隷と文化活動に専念する自由な市民という身分社会が形成されていたのである。ここでは労働は卑しい者のすること、厳しい肉体労働とし

てとらえられていた。

また紀元前6世紀末から5世紀の約9世紀間、共和国、次いで広大な版図をもつ帝国として栄えたローマ帝国の時代も事情は変わらなかった。戦争で征服した人々、異国人を奴隷にし、厳しい肉体的労働を課し、その上で自由な市民は政治活動、知的活動、文化活動を行った¹⁾。

2. キリスト教における労働のとらえ方

西洋文明の形成に最も大きな影響を与えたのはキリスト教である。キリスト教では労働をどのようにとらえてきたのであろうか。

(1) キリスト教初期の労働観

旧約聖書・創世記に記すところによれば²⁾、神が6日間かけて天地万物を創造し、最後に人間—最初に男—を創られ、男の肋骨一本をとって女を創られた。アダムとイブである。2人は、神の創ったエデンの園という楽園、天国に住まい、なに不自由なく食べられるように、あらゆる果物の木が与えられていた。ただその中に、この木の実—善悪を知る禁断の木の実—だけは絶対食べてはならないと神から厳命されていた。ところがアダムとイブは、悪賢い蛇にそそのかされ、この木の実を食べてしまった。神の唯一つの戒めに反したわけである。やがてこのことを知った神はアダムに「あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。地はあなたのために、いばらとあざみを生じ、あなたは野の草を食べるだろう。あなたは額に汗をしてパンを食べ、ついに土に帰る。あなたは土からとられたのだから」と告げる。そして神は彼らをエデンの園から追い出し、土を耕さなければ生きられないようにした。その子孫である人間が生きていくために、やむを得ずやらなければならなくなったこと、それは土を耕すこと、それが労働である。ここに示されるのは人間の原罪に対する罰としての労働・苦役である。

これは初期のキリスト教³⁾の労働のとらえ方であ

る。この考え方が、15～16世紀に起こった宗教改革で大きく変化する。

(2) 宗教改革⁴⁾

キリスト教は、多くの試練を経ながら次第に勢力を増し、14～15世紀頃までにその中心となったローマ・カトリックがヨーロッパの多くの国々に普及し、支配するようになっていた。16世紀になるとカトリックは、ドイツを収奪の対象とするなど、本来のキリスト教の教えから徐々に逸脱し始めた。最後には、教会の財源不足を補うため、天国への免罪符を販売することを始めた。こうした教会の墮落に対して、ドイツでマルティン・ルターが「95カ条」の抗議文を公にしたのを皮切りに、いわゆる宗教改革が始まり、その影響をうけたジャン・カルヴァンがフランスで地下運動を行なう等やがて宗教改革はヨーロッパ全土で展開された。

従来のカトリックでは、神は、キリストの代理者である法王・ローマ教皇に直結しているとされた。法王を頂点とするカトリックの教会のいわばピラミッド的な組織が形成され、その末端にいる神父もまた神の代弁者であり、神父の教えに従うことが神の教えを守ることにするとされた。

これに対して、宗教改革者＝プロテスタントたちは、カトリックの教会の教皇の絶対権力やピラミッド組織を否定し、個人の信仰の尊厳を強調した。組織を通じてではなく、一人一人が神の言葉を記した聖書を通して直接神につながるができる、聖書こそが正しい信仰の唯一の基礎であると主張したのである。

この結果、宗教改革以降、聖書はラテン語が主であったのが多数の国、民族の話している言葉に訳されるようになった。

(3) プロテスタントと労働観

聖書を唯一の導きとして神に繋がるといっても、聖書の解釈は無数にあり多くの会派ができ、日々の生活を送るのに精一杯の一般庶民は比較検討し理解

することは難しく、またその余裕はない。そこでたとえ聖書を理解できなくても、より多くの人々に受け入れやすい教えとして説かれたのが「自分に与えられた仕事に真面目に取り組むこと、労働すること、それがそのまま、神の御業を、神の栄光を、この地上において実現することになる」という考え方である。

Callingの語源はこの考え方による。つまりcallは神の呼びかけてであり、その呼びかけに応えるのが人間のcalling天職なのである。従来、罰、苦役、必要悪とされていたlabor労働をカトリック教会やローマ教皇の権威の否定と共にcallingへと大きく変わったのである。

後にドイツの経済学者・マックス・ヴェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』⁵⁾で、こうしたプロテスタントの精神が内面化され、個人を突き動かす精神的駆動力になったことが、資本主義発展の大きな原動力であったと分析している。

3. アジアにおける労働のとらえ方

分野、テーマに関わらずわが国のあり方を考えるとき、欧米との比較という物差しが一般的で、アジアとの対比は等閑にされがちである。しかしアジアといっても一様ではなく、アジアの主要国とわが国とを同様に考えるわけにはいかない。ここではアジアの代表的な労働に対する考え方をみておこう。

(1) インドのカースト

インドには独特の身分制度カースト⁶⁾がある。その起源は紀元前1500年頃、ガンジス川流域にアーリア人が進出し、先住民を征服し、彼らを隷属階級として支配した時代にまで遡るといわれる。その後、支配層の間にも職能の分化が生じ、バラモン(司祭者・僧侶)、クシャトリア(王侯・武士)、バイシャ(商業者、農民、庶民)、シュードラ(隷属民)の身分制度が成立した。これがやがてインド全域に広まり、バラモンを最上位として宗教的権威と社会的

特権を認め、社会秩序を組織化するものとなった。特に4世紀のグプタ王朝以後の諸王朝では、この理念を支持して社会秩序の維持にあたり、10-14世紀には村落共同体の展開に伴い、各地域では土地保有階級を中核としてカーストの固定化が進行し、16-17世紀には頂点に達した。さらに社会における機能分化が進むにつれ、主としてバイシャ、シュードラに属する人々の間にカースト集団の細分化が生じた。各カーストは閉鎖的、排他的であり、その成員は共通の習慣、祭式、さらに世襲の職業に従事する義務を持ち、他のカーストとの結婚、および飲食は厳重に禁止された。また言語もカースト言語があり、各身分間で別の言葉が話された。

こうしてカーストにおいて、バラモン、クシャトリアは精神的、あるいは知的な仕事、シュードラは肉体的な穢れた仕事、バイシャはその中間に位置づけられ、身分と仕事の貴賤が区分された。

このようなカーストは、インド近代化の障害となり、今日では憲法で否定されたが、なおインド社会に根強く残っている。

(2) 中国の科挙制度

現在の中国は共産主義国家であり、共産主義は労働者を重んじる社会体制の筈である。しかし、その実は知的労働と肉体労働の上下関係が明確で、共産党独裁の強固な官僚統治機構の下、肉体労働に従事する多く庶民がおり、貧富の差は大きいといわれる。

1960年代半ばから10年余り続いた文化大革命における徹底した知識人弾圧は、裏を返せば、知識労働への妬み、憧れだったともいえよう。また1989年の天安門事件の背後には、共産党幹部が特権的地位を利用して、許可権を乱用し、勞せずして莫大な富を築いていることへの学生や知識人の強い反感があった。

何れにしても理念としては労働者の国・共産主義国家を目指しているとしている中国には、肉体労働蔑視の考えが根強く残っている。科挙制度が長く続いたことがその主因だろうし、また科挙が長く重視さ

れていたことは、その証左の1つともいえよう。

科挙⁷⁾は、中国で行われた官吏登用試験である。

科挙は隋朝の楊堅（文帝）により始められたが、隋から唐の時代には、貴族の世襲制が続いており、その効力は発揮できなかつた。北宋時代になると、科挙によって地位を得た官僚たちが新しい支配階級・士大夫を形成し、政治・社会・文化に大きな影響を与えた。また彼らは、地位・名声・権力を得て、さらに大きな富を得ていった。

科挙の試験は三日間、各自が個室で答案を作成しその合間に食事や睡眠を自由に取るというもので書物やメモ類の持ち込みは禁じられていた。科挙の試験科目は、時代によって変化しているが、その基本は教養である経書、詩文、時事、そして歴史、政治等に関する論述であった。学識本位の科挙の選考であるが、合格すれば将来を約束されるため、その競争率は最盛期には約3000倍に達したといわれる。

この最難関の科挙に合格するためには、幼い頃より労働に従事せず学問のみに専念できる環境、学問の為高名な学者へ入門する費用を賄う資金力、関連して当時まだ高価であった書物の多数を購入できる経済力が絶対条件とされた。そのため、実際に科挙を受験できる者の大半は官僚あるいは富裕者階級の子息に限られていた。他方跡取りとなる子が科挙に合格しなければ上層階級も没落する可能性を含んでいた。

このような試験偏重主義の弊害は、次第に大きくなっていった。「万般皆下品、惟有讀書高」（ただ読書のみが尊く、それ以外は全て卑しい）という風潮が一般的になっていった。科挙に合格した官僚たちは、詩作や作文の知識をもつことが最大の関心事であり、経済や政治の実務や国民の生活には無能、無関心であった。この結果、政府は弱体化し、欧米列強の圧力が進むにつれ、深刻な問題になっていった。そして欧米列強がアジアへ侵略すると、科挙官僚は「マンダリン」と呼ばれ時代遅れの存在となり、約1300年続いた科挙は、清末の1904年に廃止された。ただ科挙は廃止されたが、知識人崇拜、肉体労働蔑

視の風潮は根強く残っている。

そしてこの考えが、現在の共産主義国家の支配階級にも見て取れるというのは言いすぎであろうか。

(3) 韓国の大学進学率の高さと両班

韓国の経済発展は目を見張るものがある。経済発展の原動力は高い労働意欲にあることに間違いのない。ところで日本では老舗という言葉に象徴されるように、何代かにわたって商売、仕事が引き継がれている場合が多いのに対して、韓国では三代にわたって同じ商売を続けている場合は稀である。成功した実業人は、子供を一流の大学に入学させ、卒業すれば上級官吏試験等を受けさせ、中央の役人あるいは大学の教師の職に就けさせることを望む。その背景には自分の子供は肉体労働ではなく、知的な仕事に従事させたいという思いがある。「文」優先の考え方である。その結果、大学卒と中学・高校卒の賃金格差はわが国より大きく、同じ大卒でも、一般に技能・技術職より事務職の方が上位に位置づけられている。

こうした考え方の背景には、1910年まで千年余りも続いてきた両班（ヤンパン）の影響がいまだに残っているといわれる。

両班とは⁸⁾、高麗、李氏朝鮮王朝時代の官僚機構・支配機構のことである。高麗が国家を建設する時、唐・宋の官僚機構制度を参考にしながら、文臣（文班）と武臣（武班）の2つの班からなる官僚制度を採用した。2つの事を「両」という字で表すためこの2つの班を合わせて両班と呼んだ。

起源的には文班は958年から科挙制度を採用し、科挙の合格者を官吏として登用する制度を取った。武班は995年ごろ六衛（軍団）が整理されたものを緒とする。その後、幾多の変遷を経るが、両班には国から田地と柴地が支給され、官僚機構を指す言葉として定着した。

その後、李氏朝鮮が建国され、制度改革の遂行される中で、文人を出す文科と武人を出す武科で構成され三年に一度科挙が実施された。科挙は基本的に

良民全体に門戸が開かれていたが、これを受験するためには、かなりの経済力を必要としたので、科擧の試験に合格し官僚になれたのは、これら両班階級が大多数だった。その結果李氏朝鮮では、両班階級が事実上官僚機構を独占し、特権階級になっていった。やがて両班、中人（世襲的技術者）、常人（一般農工商民）、賤民という四段階の身分制度が出来上がっていった。

両班は絶対的に力を持つと共に、李氏朝鮮の国教となった儒教の教えのもとに労働行為そのものを忌み嫌うようになっていく。「転んでも自力では起きない」、「箸より重いものは持たない」と言われる両班・知的官僚層・士大夫の成立である。その後17世紀の清軍の侵入により国家財政の危機を打開するために政府が積極的に売位売官を行ったことと族譜の偽造や戸籍の虚偽が多くなり、以降両班の人口は急増した。列強の圧力が強まる中、1894年甲午改革が行われ、1910年この身分制度は廃止され、両班特権は消滅した。しかし身分開放100年以上経た現在の韓国においても、志操の高い精神構造を両班意識、両班精神と呼んだりする。いまだ肉体的労働を軽んじ、知的労働を重んずる社会意識は根強いものがある。

4. 日本の労働観の源流

わが国の労働観の特徴は、肉体労働を重んじること、働くことと学ぶことが一体となっている点にある。

(1) 神話の時代と武家社会の早い到来

古く歴史を紐解くと、八百万の国であるわが国の主神・天照大神でさえ、機織などに従事されたと『古事記』⁹⁾、『日本書紀』¹⁰⁾の神代巻に記されている。また天照大神の直系とされている歴代の天皇も、農作業をされている。その象徴が新嘗祭である。天皇が初夏に自ら田植えをし、秋にそれを自ら収穫し、刈った最初の稲穂を神に捧げるという祭祀である。こう

してみると、神話の時代から、肉体労働を蔑視するという考え方は、見られない。

また、歴史の展開を追うと、貴族・文人から比較的早い時期、12世紀後半には肉体を重んずる武人の支配する社会が出現したことも大きな要因といえよう。

(2) 日本仏教と「働く」

先に、初期キリスト教では、罰としての労働・苦痛というとらえ方であったが、宗教改革以降、天職観 calling が唱えられ、これが資本主義経済発展の原動力になったと述べた。

日本の主たる宗教・仏教は「働く」をどのようにとらえているのだろうか。仏教は、本来生老病死という根源的な、生物的な次元での苦悩に向かい合い、苦悩からの解脱を目指すところから出発した宗教である。そのため労働の苦痛などは末梢的なこととしてとらえているところがある。仏法僧は世俗とは縁を切り、出家して、なんらかの僧団に所属し、在家信者の布施、寄進によって生活するのが基本で、労働を問題とすることはなかった。

仏教はインドに生まれ、その後、スリランカ、ビルマ（現ミャンマー）、タイ等に広がって小乗仏教となり、いまま修行者の生活は、直接街にでて、布施を乞う托鉢という形が続いている。他方、北には中国、モンゴル、朝鮮等を経て日本に渡り、大乘仏教となっていく。

日本へ仏教が伝来したのは538年だと伝えられる。それ以降世界の他の主要宗教と同様、幾多の変遷を経て、今日に至っているが、全世界の仏教徒3億数千万人、わが国の仏教徒はその4分の1を占める¹¹⁾。

現在最も信者数の多い親鸞を開祖とする浄土真宗は、この汚れた世から、南無阿弥陀仏と唱えることにより、誰でも極楽浄土にいけると「厭離穢土」、「欣求浄土」という表現を用い、死後の「あの世」に強調点を置き、信仰中心の「彼岸主義」と呼べるような特徴をもっていた。

15世紀、室町時代に、後に浄土真宗の中興の祖と呼ばれる蓮如が現れ、真宗の一般への普及に尽力した。蓮如は彼岸（浄土）のために此岸（穢土）を否定するのではなく、この世の勤めを大切にしない限り、あの世において救済はされないとこの世の意義を強調した¹²⁾。具体的に言えば、当時固定されつつあった士農工商どの職業であれ、それぞれ与えられた仕事を大切にすることが良い信者であり、この世の中心に報恩の行として勤労をおいたのである。

その典型例が近江商人であろう。熱心な真宗の信徒であった近江商人は行商からはじめ、次第に全国に商いを展開し、多くの富を蓄えたが、その働き方は勤儉、忍耐、刻苦勉励という言葉で象徴されるものであった。その背景には労働と信仰が一体となった宗教的信念があった。この教えは江戸時代にさらに広がっていく。

いまひとつ鎌倉仏教に始まり日本人の精神風土に現在まで多大な影響を与え続けている宗派の一つに禅宗がある。禅宗にも栄西を開祖とする臨済宗と道元を開祖とする曹洞宗がある。臨済宗では¹³⁾、公案禅という師弟の問答による修行禅を重んじるのに対して、曹洞宗では¹⁴⁾「只管打座」による「即身是仏」を説くところに特徴があるが、両宗とも座禅を重んじ、一見日常的な作業、労働には無頓着のようにとられがちである。しかし実際は修行として、朝から晩まで黙って座禅をし続ける接心をすると同時に、まき割り、風呂焚き、便所掃除という作務をする。日常的な肉体労働も重要な修行なのである。臨済宗の著名な禅師・百丈は「一日作さざれば、一日食らわず」と働かなかつたら食べてはならないと戒めている。

また道元はその著『典座教訓』の中で典座の心得を述べている¹⁵⁾。典座とは寺で食事を作るいわば料理人のことである。料理することも座禅と同じ修行の一環だとする。例えば食する者の状態を常に考えながら献立を考え料理する。食する者が疲れた状態であれば同じ献立でも少し、甘めの味付けにする。あるいは前日に何を食べ、当日の朝食や昼食を考慮

した夕食の献立にする。当然地の食材、旬の食材を最大限活用する。こうした配慮は禅の教えそのものだという¹⁶⁾。

ここでは宗教と日常生活、立ち居振る舞い、労働は一体化している。

(3) 江戸時代に固められた日本的労働観

かつて江戸時代は鎖国の時代、士農工商の身分体制が確立した閉鎖的な時代としてのみ論ぜられることが一般的であった。しかし、現在ではむしろこの260年間余に日本文化が熟成され、その後の日本人の精神構造に大きな影響を与えたと評価されることが多くなった。

労働観の形成についてもこの時代の意味は大きい。神道、仏教そして儒教が渾然とした形で、士農工商何れの階層にも影響を与え、日本的労働観が形成されていった。ここでは思想的、実践的に影響力のあった三人を紹介しておこう。

① 鈴木正三

鈴木正三は¹⁷⁾、1579(天正7)年、三河国加茂郡(現愛知県豊田市)で、徳川氏の家臣・鈴木重次の長男として生まれた。長男であったが家は弟が継ぎ、正三は別に一家を興している。大阪の陣等で武功を挙げ200石の旗本となった。三河武士であった正三は、戦闘等で常に生死を身近に感じ、17歳の時経典を読んで以降、仏教に傾倒し、職務の間を縫って、諸寺院を参詣した。同僚の儒学者の反仏教の意見に反発し『盲安杖』を書き、翌年42歳のとき出家して僧侶となる。旗本の出家は禁止されていたが、正三は主君の秀忠の温情で罰せられることなく済んだ。正三は、それ以降、臨済宗の大愚宗築や曹洞宗の万安英種らに参禅した後、故郷三河に帰って石平山恩真寺を創建して執筆活動と布教に努めた。切支丹の教義を理論的に批判した『切支丹』(1662年)は優れた仏教書として高く評価されている。

また『万民徳用』(1661年)は代表作の1つであるが、仮名書きのやさしい和文で、「人々の心のもち方が自由となり、人々が心の世界の中で、自由に

振舞うことができるようになるためならば、南無阿弥陀仏と念仏を唱えるもよし、座禅をしてみるもよし、さらにはそんなことなにもしなくても、毎日、自分に与えられたそれぞれの仕事に、精一杯打ち込んで働いていけば、それが人間として完成していくことになる」と、民衆の日常に目を向け、宗教、禅、念仏にとらわれず、世俗的な職業に励むこと自体が、仏教修行であると「世法則仏法」を説いた。即ち商人や職人の生活の業も立派な行いと見え、心がけ次第で労働もそのまま仏行となるとした。さらに当時卑しいこととされていた商人の利益も否定せず、正直に生業に励むことが仏道修行である、人に奉仕した結果が利潤を生むと評価した。

正三はこの考えを広く民衆に広めるために、各地の寺の整備にも努めた。こうしたことから正三は、職業倫理を日本で初めて説いた禅僧といわれた。1665 (明暦元) 年逝去。享年 76 歳。

② 石田梅岩

正三の思想を一層発展させたのが石田梅岩である。梅岩は¹⁸⁾江戸中期 1685 (貞享 2) 年、現在の京都府亀岡市の農家の次男として生まれた。長男が家を継ぐ慣わしであるため、11 歳で京都の呉服屋の丁稚奉公に出たが、その後一旦故郷へ帰る。1707 年、23 歳の時再び奉公に出る。子供のころから律儀でまじめな性格で、奉公先の家人から「たまには外に出かけたら」と夜遊びを進められたエピソードが残されている。仕事の傍らで「自分とはなにか」、「人はいかに生きるべきか」等を真剣に考え、早朝書物を読み、みなが寝静まった後、勉学に励んだ。そして 1727 年に出遭った在家の仏教者小栗了雲に師事し思想家への道を歩み始め、45 歳の時に借家で塾を開いた。当初は男子のみを対象としていたが、聴講を望む婦女子も多く、障子越しの別室にて拝聴が許された。当時としては異例のことである。

梅岩は「学問とは心を尽くして性を知る」、「心が自然と一体となり秩序をかたちづくる」として、「性学」と自らの学問を称したが、その後手島堵庵等の門弟によって「心学」の語が一般的となった。その

思想の根底にあったのは、宋学の流れを汲む天命論であるが、儒教、仏教、日本古来の神道の思想を総合した実践的なものであった。

梅岩は、知るだけでは十分ではない、実践しなければ聖人ではないと、出家もせず、庶民の中に身をおき、宗教と仕事は別ものではないと説いた。特に梅岩は、正三が認めた商業という仕事の価値を一層明確に示した。梅岩は士農工商、身分の差はあっても、職分上、人は平等であるという機能的な社会観に立ち、どの職業も社会には必要だとし、商人が売買をし、利益を得ても当然だとして「利をとるは商人の正直なり」とした。

梅岩は「正直」と「儉約」が重要だとしているが、彼の言う「正直」とは、所有関係や契約関係を守り、正当なやり方で商いを行い、利益をあげること。いわば「実の商人は先も立ち、我も立つことを思うなり」。すなわち「自利即利他」の説だと言える。また「儉約」とは「世間のために、三つ要ることを二つで済ます」。これは自分のためにだけ行うケチとは違うのだとする。「正直」、「儉約」の背景には、物の命そのものを生かし、さらに人のために考える深い世界観がある。さらに言えば、その実践的な教えは、深い内省と求道の精神に裏付けられている¹⁹⁾。

梅岩は、1744 年、60 歳で死去するが、彼の創始した心学は、その後も商人を中心に農民、さらに武士階級にも大きな影響を与えた。

③ 二宮尊徳

農業の分野で日本の労働観に大きな影響を与えたのは江戸後期の農政家・二宮尊徳である。尊徳は²⁰⁾ 1787 (天明 7 年)、相模国足柄上郡栢山村 (現在の神奈川県小田原市) に比較的裕福な百姓の長男として生まれたが、彼が物心つく頃には、水害等で田畑は流出し、家産は急激に傾いた。加えて 14 歳そして 16 歳の折、父ついで母が死去、一家は離散した。尊徳は伯父の家に身を寄せることになった。この幼少期にも尊徳らしい逸話²¹⁾ が幾つかある。・まだ幼少であった頃、わらじを編んで金を稼ぎ、

酒好きの父のために酒を買った。

- ・伯父の家で暮らしていた頃、寝る間も惜しんで読書をした。油代がもったいないと伯父に叱られると、荒地に菜種をまいて収穫した種を菜種油と交換し、それを燃やして勉学を続けた。
- ・荒地を耕して田植え後の田に捨てられていた余った稲を集めて、米を収穫した。

こうした努力で尊徳は20歳までに生家の再興を成し遂げると、地主経営を行いながら小田原に出て、武家の奉公人としても働き出す。奉公先の小田原藩家老・服部家でその才覚が認められ、服部家の財政立て直しを頼まれ、見事にやり遂げる。その才覚は近隣に知れ渡り、次々と経営再建の依頼をされる。小田原藩主・大久保家の分家であった旗本・宇津家地行所桜町領の経営再建をはじめ、尊徳の指導は小田原藩領のほか日光神領、烏山、下館、相馬各藩に及んだ。その間、1842年老中水野忠邦により普請役として幕府役人にも取り立てられた。また一家、一村、一藩再建の指導書『日光仕法雛形』を作成している。生涯に復興した町村は600を超えるが、日光神領立て直し半ば、1856(安政3)年病没、70歳であった。著書には『為政鏡』、『富国方法論』、『三才報徳金毛録』等がある。また門人であった富田高慶は『報徳記』²²⁾、福住正兄は『二宮翁夜話』²³⁾を著している。

尊徳がなぜこれほどの藩、村落の再建を成し遂げたのか、その思想、勤労哲学のエッセンスをみてみよう。彼の教えは、報徳教と称せられることもあるが、それは尊徳が独学で神道、仏教、儒教等を学ぶとともに農業の実践から修得した、豊かに生きる知恵であり、決して宗教ではない。

尊徳の世界観の根本に「天理」と「人道」の考え方があり、この2つは同じではない。「天理と人道とは、格別な物なるが故に、天理万古変ぜず、人道は一日怠れば忽ち廃す。されば人道を勤むるを以て尊しとし、自然に任ずるを尊ばず」。要は天理という宇宙不変の法則をわきまえて、人為的努力を怠らないのみが最善を尽くす(人道)というのが、人間

のあるべき姿というのである²⁴⁾。

その上で尊徳の実践論は、至誠・勤労・分度・推譲に集約できる。至誠とは誠・徳・仁という心の状態であり、その上で日常生活のすべての選択を行い実践していくことが勤労である。分度とは、至誠の状態から勤労することにより、それが消費活動ともなり自ずと贅沢を自ら慎むことになることを言う。

そして推譲とは、分度して残った余地を自分自身の将来、それ以上に他に譲ることをいう。単なる贈与ではなく、至誠・勤労・分度の結果として行われることである²⁵⁾。

尊徳は、この哲学を生涯身をもって実践し抜いた。

おわりに

人はなぜ働くのか、労働観に影響を与えた古今東西の考え、思想の要点を見てきた。わが国の一つ大きな特徴は、他の多くの国々と違って、神道であれ、仏教であれ、思想であれ、肉体的労働を尊重していること、また働くことと学ぶことが一体化していること、さらに働くことは自分だけではなく他の役に立つことが挙げられる。こうした労働観が、その後のわが国における労働観にどのように関連しているのかは、次稿以降で考察したい。

注

- 1) フィンレイ, M.I. 編, 古代奴隷研究会訳『西洋古代の奴隷制』東京大学出版, 1974, pp. 215-233 参照。
- 2) 樋口進訳『旧約聖書と伝承史』(聖書の研究シリーズ 28) 教文館, 1987, pp. 149-153 参照。
- 3) 『旧約聖書』の出版は数多いが、ここでは、ジャコブ, E. 著, 西村俊昭訳『旧約聖書』白水社, 改訂版, 1986年を示しておく。
- 4) メラー, B. 著, 森田安一他訳『帝国都市と宗教改革』, 教文館, 1990年。
- 5) ヴェーバー, Max 著, 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫,

- 1989年が代表的な翻訳書である。
- 6) 小谷汪之『インドの中世社会 村・カースト・領主』岩波書店, 1989年。
デュボア, J.A. 著, ビーチャム, H.K. 編, 重松伸司訳注『カーストの民, ヒンドゥー習俗と儀礼』平凡社, 1988年, pp. 315-320 参照。
- 7) 宮崎市定『科挙史』平凡社, 1987年。
- 8) ヘンダーソン, G. 著, 鈴木沙雄・大塚喬重訳『朝鮮の政治社会—渦巻型政治構造の分析』サイマル出版会, 1973年。
宮嶋博史『両班—李朝社会の特権階層』中央公論新社, 1995年。
- 9) 倉野憲司校注『古事記』岩波文庫, 1963年。
- 10) 坂本太郎, 家永三郎, 井上光貞, 大野晋校注『日本書紀』(全5冊) 岩波書店, 1994年-1995年。
- 11) 文化庁『宗教年鑑』平成24年版。
- 12) 稲葉昌丸校訂『蓮如上人御一代聞書』岩波文庫, 1942年。
- 13) 入矢義高訳注『臨濟録』岩波文庫, 1989年。
- 14) 道元, 水野弥穂子校注『正法眼蔵』(全4冊) 1990年-1993年。
- 15) 内山興正『人生料理の本 典座教訓にまなぶ』曹洞宗宗務庁, 1970年。
- 16) 同上, pp. 97-98 参照。
- 17) 鈴木鉄心校訂・編「鈴木正三・生涯と思想 盲安杖, 驢鞍橋, 反語集, 二人比丘尼, 念仏草子」『鈴木正三道人全集』(改訂版), 山喜房仏書林, 1981年。
- 18) 柴田實編『石田梅岩全集』(全2巻), 清文堂出版, 1994年。
- 19) 寺田清一『石田梅岩に学ぶ~日常凡事に心を尽くす』致知出版社, 1998年。
- 20) 大貫章『二宮尊徳の生涯と業績—報徳仕法の理論と実際』幻冬舎ルネサンス, 2010年。
- 21) 同上, pp. 22-27 参照。
- 22) 富田高慶述『報徳記』岩波文庫, 1933年。
- 23) 福住正兄筆記, 佐々井信太郎校訂『二宮夜話』岩波文庫, 1941年。
- 24) 寺田清一編『心を耕し, 生を拓く 二宮尊徳一日一言』致知出版, 2007年, pp. 9-10 参照。
- 25) 同上, p. 156。
大貫章, 前掲書, pp. 173-180. 参照。

その他の参考文献

- ・橋木俊詔編著『働くことの意味』第1巻, ミネルヴァ書房, 2009年。
- ・坂東眞理子『働くということ』NHK出版, 2011年。
- ・岡本幸治『“働く”は“傍楽”なり』いぶき書房, 2000年。
- ・島田晴雄『日本の雇用』ちくま書房, 1995年。
- ・社会政策学会年報『労働問題研究の方法』第20集, 1976年。
- ・渡邊美樹『きみはなぜ働くか。』日本経済新聞, 2006年。